
僕らはこの青空の下で

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らはこの青空の下で

【Zコード】

N7748D

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

『なんでも同好会』に所属する、高彦、春樹、翔太の三人が繰り広げるハチャメチャコメディ。この青空の下、『なんでも同好会』は今日も元気に活動中です。

(前書き)

これは木村よしにとつて初めてのハチャメチャもの。女の子の出でこない、青春をテーマにした作品です。自分ではこの三人が気に入つてしているのですが、連載物にしようかとも悩んでおります。一話を短編として載せてみますので、よければご意見をお聞かせ下さい。ご協力お願いします！

チャイムが聞こえる。

クーラーの無いこの埃っぽい部屋のなかを、開けられた窓から生ぬるい風が通り抜けていった。

「あ、一づい、一

そう語りて三山高彦は、長机にばたりと伏せた。

かすかに冷ややかとした心地好さが皮膚に伝わるか、それもすぐに自分の体温で消えてしまう。

「なんでもこの部屋が俺たちの部室なんだよお」

一部室が貰えただけでも有難いと思え

パタパタと銀行の宣伝が印刷されたうちわで扇ぎながらそう言ったのは、顧問の最中大介である。

「うつせえモナカ」

「サナカ（最中）だ！」

「ああああ。ここにいる二番寝っ飛びー！」

窓際に座っていた中山春樹が、困ったように笑う。

壊れかけたブラインドが、ガシャガシャと音を立てた。

「今時クーラー無い生活なんて考えられへんわ」

関西弁混じりは邦田翔太。

高彦の向かい側で、同じように長机に伏せている。

クーラーの無い、このボロ教室。

ここは『なんでも同好会』といつ、なんとも意味不明な部活の部室である。

『同好会』とあるが、この山中高校では部活動のみが認められる為、どんなに名前が『同好会』でも、それは顧問のいる『部活』なのだ。

『なんでも同好会』とは。

名前の通り、なんでも良いから集まっちゃえ　的なノリで生まれた部活動。

特に何かをするって訳でもなく、いつやつて週一でただなんとなく集まる程度のもの。

部員はたった二名。部長の三山高彦、副部長の中山春樹、書記の邦田翔太。

そして顧問教師の最中大介。

「アイス食いてえ」

「春樹、ガリガリくん」

「えつ嫌ですよ。なんで俺がパシリなんですかっ」

窓から入る風で、春樹の色素の薄い髪がサラリとなびく。

またブラインドがうるさく音を立てた時、ドアが「ンン」と一回ノックされた。

「あ、はーい、どうぞお」

窓際にもたれていた春樹が、姿勢を正して返事をした。

ガラリとドアが開く。

「すいません、園芸部なんんですけど、今日花の水やり頼んでいいですか？」

ドアのところに立っていた生徒が、ズレかけた眼鏡を直しながら言った。

「あ、いいですよ」

「助かります。今日はどうしても部員全員での会議があつて」

「大変ですね。わかりました」

快く承諾した春樹に、その生徒は安心したように笑顔を作った。

今『なんでも同好会』は、『なんでも引き受け屋』（雑用係ともいう）へと変わりつつある。

困っている奴を無償で助ける。

これは顧問である最中の提案。

はじめ「無償で」というところに、高彦と翔太は軽く反発したが、今ではボチボチこのスタイルが型に嵌りつつあり、校内では『なんでも同好会』を頼る生徒が急上昇中なのだ。

「中庭の花壇だけでいいって言つてたけど…」

サンサンと輝く太陽の下に点在する、馬鹿みたいに数の多いヒマワリやヘチマの花壇。

「花壇の数多すぎだろーー！」

それを目の前にして、痛いほどの口差しを受けながら、高彦、春樹、翔太の三人は立っていた。

「ホースが一本とジョウロが二個だから…」

「俺ホース」

「は？ そんなん俺かてホースがええわ！」

勝手な高彦に、当然だが翔太が反発する。

「あ？ 部長はホースって決まつてんだよ」

「そんなんいつ決まつてん？！」

縁のホースを巡つて、醜い争いのゴングが鳴り響く。

「…今わつき」

「何やねんその微妙な間！ てか部長なんやから、部員の為にホースを譲れや！」

「嫌に決まつてんだろーがバカタレ」

「ああ？！？」

睨み合いながらホースを引つ張り合つ二人。

「ちょっと待つて下さいよ！俺だつてホースがいいです！」

止めに入るような形で主張した春樹に、一旦高彦と翔太が動きを止めた。

「は？ 何言つてんの、春樹

「え？」

春樹がキヨトンと首を傾げる。

「春樹はジョウロに決まつてゐやん」

「えーーー！」

何当たり前なこと言つちやつてんの的な口をする一人に、春樹は不満の声を上げた。

「そんなのズルいぢやないですか！なんで俺がジョウロ？ー！」

「何でつて言われてもなあ

「春樹。世界が決めたことだ

「そんなんみみつちい事、世界が決める訳無いでしょーーー

二人が三人になり。

やつぱりホース争奪戦が始まった。

長身の高彦と翔太に対して、160前半しかない春樹は少し不利かもしれないなかつたが、それでも対等にホースを奪い合つ。

結構な時間そのぐだらないやり合いで続いて、

「よーしーもう公平にジャンケンで決めるぞーー！」

結局そつなる。

「よつしゃあー負けても文句無しやでーーー！」

「最初はグーからですよ~。」

それぞれが手に氣を集中させる。

「うこうう時だけ真剣になる馬鹿三人組。

「うこううはグー。」「

力の入った拳が三つ振り出されて。

「うこううジャンケン」「

蟬がうるわしく鳴いてくる白虹。

「うこううポイー。」「

一つの戦いが幕を下ろした。

「うー、ちやつちやか水やり終わらねー。」

言いながら上機嫌にホースを手にもつ春樹。

「…納得いかねえ」

「…せからジャンケンは好きとひねん」

それとは対称的に、鼻唄混じりに花壇に水をやり始めた春樹を恨め

しゃうに見て いる長身一人。

その手には象の形をしたジョウロが。

象さんを握り締めた『テカイ男は、正直かなり滑稽である。

「もー、一人とも一ぼーっと立つてないで、早く水やり始めて
くださいー?」

ホースを勝ち取った(たかがジャンケン)とにかく満足してい
るようで、少し上から田線で春樹は高彦と翔太に言った。

その春樹の言葉で。

太陽はサンサン。

一人の田はギラギラ。

「なあ、翔太」

「なんや、高彦」

声を潜めた二人の会話。

「俺、やつぱ我慢できねえ」

「ん。俺も同感や」

「いくか?」

「いこか」

高彦と翔太の視線が、ホースで水をやる春樹に定まる。

それはまるで獲物を狙う獣。

- 一 む か し の こ と

その顔と皮肉の優しく明るい声で高彦が呼ぶ

はし？

ぐるりと春樹がこちらを振り向く。

「「ホー入寄越せえええーー！」」

ものすごい形相で接近してくる高彦と翔太に、春樹は思わず小さな悲鳴をあげた。

「うわつ！い、嫌だ————！！！」

ホースを持つたまま逃げ出す春樹。

それを追い掛ける高彦と翔太。

「やつをジャンケンで決めたじゃないですかああ！」

春樹は非難の声をあげる。

逃げる足は止まらない。

「うへせえーいいから寄越せー。」

「春樹はやつぱジコウロやるひ?ー。」

追い掛けの側も止まらない。

そして。

ツンツ

「わつ?ー!」

今まで手に握り締めていたホースが、突然何かに引っ掛けたように伸びなくなり、春樹はバランスを崩した。

正確には、何かにホースが引っ掛けた訳じゃない。

何事にも、もちろん終わりはあるわけで。

単にホースが、春樹が持ったまま逃げた為、それ以上伸びないとこらまできただけだった。

しかし、バランスを崩した拍子に、春樹はホースを手放してしまい。

水を放ち続けるホースが、放物線を描いて宙を舞う。

「「あ」」

水しぶきが、キラキラと美しい。

そして。

「げつ」

三人の動きがぴたりと止まる。

少し顔が引き吊っていた。

「お前らああ（怒）」

ホースの水をまともに浴びて、髪や服から水を滴らせながら立っていた最中は、腹から絞りあげたような低い声で怒りを露にした。

「ちゃんとやつてるか心配で見に来てみたら…」

ズリ落ちた眼鏡をクイと持ち上げる。

「お前らはほんつと小学生以下だな？！」

怒鳴った拍子で最中の髪からパラパラと水が飛び散った。

「やん、センセ。水も滴るイイ男やんか」

「んな怒んなつて、モナカ！」

「サナカだつ！」

まだ三十路を越えたばかりの最中は、確かにイイ男といえばイイ男なのだが、その若さ故にこうやって生徒にからかわれやすいというのも事実であった。

「で。誰が一番悪いのかな? ガキンチョービも」

「なつー俺らはもつ高ーですー! ガキンチョーなんかじゃありませんー!」

「いや、そこ真剣に抗議するとこじやねえから」

少しズレた春樹に、高彦がビシリと突っ込む。

「てか、センセ。誰が悪いとかちゃうから」

「ん?」

「俺ら三人でしたことやからな」

「翔太…」

二カリと笑つてそう言った翔太に、高彦と春樹は切な気に眉を寄せた。

「そりだよな。これは、俺たち三人の仕業だ」

「高彦…」

なんて良い奴らなんだ。

さつきまでホースを独り占めしようとすることを、春樹は恥ずかし

く思つた。

「… ありがと、」

誰にも聞こえないくらい小さな声で、春樹は呟いた。

「お、じゃあ三人でペナルティな」

「「く？」」

予想外の最中の言葉に、高彦と翔太が間の抜けた反応を返す。

「今日帰る前に部室の掃除な」

最中のその宣告を最後まで聞く前に、

「？」

「？」と春樹が最中に突き出された。

「え？ なに？」

「「中山春樹くんが全て悪いと思いますっ…」」

高彦と翔太の声がぴつたりと揃つ。

「はあ？」

「ホースはお前の担当だつたろ」

「さつさつ二人のせいだつて、」

「何のことだか」

「……」

信じられないといつ顔をする春樹を見て、最中は一矢口と口の端を上げた。

「中山。人間なんてそんなもんだ」

「そんなあ」

教師としては少し問題発言かもしけないが、嘘は言つていない。

「俺はジヨウロやつたからな」

「ま、頑張れ」

意地悪く笑いながら、春樹の両肩にそれぞれ、高彦と翔太の手が置かれる。

「ホース中山」

「うの、裏切り者…………」

春樹の悲痛な叫びが真昼の中庭に響き渡つた。

まあこんな感じで、この青空の下、『なんでも同好会』は、今日も元気に活動中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7748d/>

僕らはこの青空の下で

2010年10月11日11時39分発行